特集・職員の自主研究❶

私のテーマと仕事〈インタビュー〉

岩崎駿介

一――アジアで感じたこと
二――自治体行政の現場で
三――アフリカからアメリカへ、横浜へ
四――そして、いま

編集部　今回の『調査季報』は「職員の自主研究」というテーマで特集を組んでいます。その中で本稿は、視点を少し変えて、一人の人が何かの問題意識やテーマをもって生きていくときに、自分の仕事をどう位置づけてテーマを追求してきたかということを、五十四年まで九年間、横浜市で都市デザインの行政にたずさわっておられた岩崎さんの場合についてお話しいただきたいのです。岩崎さんは大学卒業後、アフリカのガーナ、アメリカのハーバード大学、ボストン市役所で建築学や都市計画を深められ、四十五年からは横浜市で仕事をして来られました。そして五十四年から三年間、バンコクのESCAP（国連アジア大平洋経済社会委員会）へ派遣され、帰国された五十七年八月からは筑波大学へ移られて、社会工学系の助教授をされています。この間の体験と思考をお話しいただくことは、それぞれの行政分野で、自分の仕事をどう受けとめ自主的な勉強や研究をすすめたらよいかを考えている市の職員にも、示唆を得る点が多いと思われます。

一――アジアで感じたこと

編集部　まず、バンコクのESCAPから昨年八月お帰りになったわけですが、三年近くアジアの各国をみてこられて、どのようにお感じになっていますか。

アジアの貧しさ

岩崎　正直、私のこれまでの経験がどれほどご参考になるかまったく分らないのですが、アジアでの体験ということからお話しすれば、最も感じたのは「貧しい」ということです。全体の一〇分の一ぐらいの人に五〇％の富が集まっていて、この人たちは普通の日本人よりもずっと豊かに暮しているのですが、残りの大部分の人々は非常に貧しい。所得水準は、中堅の警察官で月三万円、大学卒初任給が一万七五〇〇円くらいでしょうか。

多くのアジアの国は首都だけが大都市で、そこへ農村部から人々が流入してくるので、激しい人口増加に悩まされています。公共住宅の建設戸数は、バンコクの場合、数年間で一万戸程度ですから、集中する人口には焼け石に水で、多くの人はスラムに住まざるを得ない。湿地帯に地主と短期契約で土地を借りるなどして、簡単な建物を作って住みつく。首都人口の五分の一から多いところでは三分の一くらいがスラムに住んでいる都市もあります。

医療施設や学校はかなり整備されてきていますが、水道施設は不十分だし、下水道が不備なので雨が降るとすぐ水が溢れる。道路も少く交通は渋滞、バスは混む。もとより福祉施設に至ってはとても手がまわりかねている状態です。バンコクの人口が五六〇万人で市の年間予算が五〇〇億円です。横浜市が二八〇万人の

人口で一般会計が七千億円であるとすると、バンコク市民一人当りの市の予算は横浜市民の二八分の一です。もちろん物価が日本より安いから必ずしも二十何分の一ではないにしても、かなりの貧しさであることは確かです。この背景には貧富の二重構造があるのです。

編集部　アジアの人びとの印象はいかがですか。

岩崎　西アジアなども含めた広いアジアの中でもとくに東南アジアの人々は皮膚の色や容姿が日本人と極めて近いせいもあって、ぼくがこれまで訪れた国々の中で最も異和感のない、同じ人間として接することのできる人々でした。アメリカなどでは「よその国へ来ている」感じがあるのですが、アジアではそれがないのですね。

人間居住の改善へ情報等交換

編集部　ESCAPではどのような仕事をしておられたのですか。

岩崎　私のいたESCAPは世界を五つに分けた国連のいわば地域事務所の一つで、一〇の部に分れているうちの工業・人間居住・技術部の、人間居住計画課の課長をしていました。私のいたところは、その名前の示すとおり、工業と技術との接点で人間居住の問題を解決しようとしてきた歴史をもちます。国連機関の一つであるHABITAT（UNCHS＝United Nations Center for Human Settlements）とも、組織上の連りはないのですが、連携をとっていました。

とはいっても、ESCAPの年間予算は人件費を除くと約一〇億円にすぎず、二三億人の住むエリアの居住環境というばく大な対象に対して、できることには限りがあります。居住環境の改善というのは各国の国内問題であって、国間の摩擦を調整するという機能は必要でない。各国がもつ居住環境について持っている知識や技術をいかに豊かにしていくかということを目標にして、情報を交換したり、調査を企画、実施し、その結果を報告書にまとめたり、何かの勧告をするというような仕事をしていました。中でも五十七年六月に横浜で開催した国連アジア大平洋都市会議がぼくの在任中の大きな仕事のひとつでした。

編集部　国連の機関の仕事なので、ご苦労も多かったことと思いますが。

岩崎　以前にアフリカ、アメリカと四年間の海外生活の経験があったとはいえ、九年間のブランクがあります。会議、資料の作成すべて英語ですから、とくに初めの一年間はギャップを埋めるのに非常に苦しみました。一日の勤めを終えると家へ帰る車の運転もできないくらい疲れるのですね。信号待ちをしているうちについ眠ってしまうこともありました。あるとき、ぼくの後ろに停っていた車がいつの間にか前へまわっていて、荷台に乗っていた若い女性数人が笑っているのですよ。ぼくが車の運転席で眠っているのがおかしくて。

編長部　アジアの都市にもちがいがあると思いますが。

岩崎　西アジアは東南アジアよりさらに貧しいといえます。インドのスラムや人々の生活条件はもっとひどくて、歩道で寝ている人も多い。ASEAN五カ国は経済成長率もまだよいほうで、インドほど底辺における苛酷な条件はもっていません。

生き生きとしたアジアのスラム

編集部　建築家やアーバン・デザイナーの見地からみて感じたことは何ですか。

岩崎　都市デザイン的にみる視点とは、たんに都市施設の状態が整い、物的に美しく、バランスを保っているという点だけでなく、その中で人々の生活が生き生きしているかという点が重要で、物的には豊かになっても、人々のふれあいがなければ、都市デザイン的意味は減少するといわなければならないでしょう。そのような「生活の質」からみて、二つの興味深い例を述べたい。ひとつはインドネシアのスラム「カンポン」で、もうひとつはバンコクのスラムです。

インドネシアの都市では、四車線の道路に面した一皮だけは自動車修理工場やガソリンスタンド、物売り場などが外向きに並んでいますが、幹線道路で区画された一km四方ほどの区画の中へ一歩入ると、二～三mほどの曲りくねった細い道が縦横に走っていて、真中のほうには沼や子供の遊べる広っぱのようなものもある。道の両側に家が建ち並んでいて、小さな駄菓子屋や日用品店などもある。最近では政府の改良計画によりU字溝ができ、道もコンクリート舗装されるようになってきています。狭くて車が入れないから子供たちもそこで安心して遊べます。ものごともカンポンごとに話し合って決めるし、回教の国だからモスクもあちこちにあり人々が集います。コミュニティのまとまりは強固です。物的には貧しいかもしれないが、生活していく意味、では必ずしも貧しいとはいいきれない。もともと「カンポン」には「村」という意味があって、農村から人々が都市へ移住する過程で、村コミュニティの関係が都市の中にもできていったのだと思われます。

編集部　『調査季報』73号のアジア都市の特集でも、インドネシアの留学生がカンポンについて話していました（73号・一九頁）が、建物の色などもカンポンご

とに話し合って決め、それに誇りを持っているということです。

岩崎　バンコクのスラムについては同じ号に私の妻も書いていますが（73号・二九頁）、困っている家族や捨て子などがあれば、まわりの人々がなんとか補完しようとする社会的意識がある。社会福祉施設もなく、麻薬もはびこっているが、必ずしも悲惨ではない。アメリカのスラムは物的な傷み以上に人の心が荒廃していて、何の理由もなくガラスをたたき割ったりする。ここにはそういう感じはない。極めて力強く生きていこうとする面を、バンコクのスラムやインドネシアのカンポンに感じることができます。

痛感するアジアとのつながり

編集部　仕事をすすめる過程で各地の都市や人々の生活をみる機会は多かったと思いますが。

岩崎　ぼく自身は住民にじかに接する中で調査し考えることが、居住環境をより良く変えていく方策を見出していく原動力になると思っているのですが、国連というものは政府の代表機関で構成されていますから、ぼくが国連職員として各国を訪れるときにも、国の代表者と接することになります。ぼく一人でもカンポンに入って行ったりもしましたが、そういう機会よりも、政府機関の人と話したり、その人たちの案内で都市を見ることが多いのです。

だがそれだけでは公式的にすぎる。現実の問題をとらえられない。だからこれと併行してボランティア活動をやっていました。難民やスラムの救援活動をしているジャパニーズ・ボランティアセンター（JVC）は、国連とは対照的なノン・ガバメント・オーガニゼイション（NGO）です。ほかの熱心な日本人の人たちと一緒に、時間の許すかぎりここの活動をしていました。この活動はいまも続いています。

編集部　ESCAPに行く前に持った問題意識を、三年間の勤務を終えて振り返ってみると、どうでしょうか。

岩崎　バンコクへ行く前にある雑誌からインタービューを受けたとき、惰性を払拭して新しい角度でものをみたい、住民参加の再勉強をしたい、というようなことを答えているのですが、三年間を振り返ってつくづく感じるのは、初めにもいいましたが、アジアとのつながりですね。行く前は日本を問題の中心と考えていたと思う。日本にいて同じ新聞を読み状況を共有していると、自分の知覚の範囲が日本であり、日本を前提にしながら他国との関係を考えることになる。日本以外は〝他国〟なんですね。以前アフリカとアメリカにいたときは、これはやはりほかの国だと感じた。けれどもアジアにいるとほかの国なのかなと思う。顔形が同じだったり性格的に似ているせいもあるが、空間意識がひろがって、日本で切るというか、日本だけで限定して考えることができにくくなったのです。スラムの貧しい人たちがぼくとどういう関係にあるかが非常に気になりだした。アジア社会の貧富の二重構造は日本経済や日本社会とどうつながっているのか、南北問題や人間居住の問題をもうすこし論理的にとらえて、そのギャップを埋める手助けになるようにしていきたいと考えています。

二――自治体行政の現場で

編集部　ひるがえって、ESCAPの前は四十五年から五十四年まで九年間、横浜市におられたわけですが、どういう考えで横浜市へ来られたのですか。

五つの立場を堅持

岩崎　ハーバード大学の修士課程を終えてしばらくボストン市役所で働いていて考えたのですが、都市問題を扱う場所には、コンサルタント、国の機関などいろいろある中で、自治体は最も矛盾をかかえているところであり、それだけにおもしろくかつ可能性も非常に大きいと思えたのですね。中でも横浜市は、都市の急膨張に伴う問題をたくさん抱えていたし、それに対する施策もいろいろ試みていて、前から関心をもってみていましたので。

編集部　横浜市ではどういうことをしたいと考えておられましたか。

岩崎　当初、五つの立場を堅持しようと思っていました。第一に建築の教育を受けたから建築家。第二にアメリカで都市計画を学んだから都市計画家。第三に市役所の職員だから行政官。第四に学者として研究し発表していく態度。第五にコミュニティ・オーガナイザー。住民のもつ要望、要求を具体化していくために行政官の立場を離れてもやっていかなければならないと感じていました。アーバン・デザインというのは後から結果的に出てきたことで、当初はこの五つの立場を同時にバランスよく発展させたいと思っていました。

初めの二年間は嘱託として在職していました。市の職員になりきれるかどうか自分でも確信が持てなかったし、それまでもアフリカ、アメリカとほぼ二年単位に場所を変えていましたから。結果的には非常におもしろかったし、職員としてやっていける自信が持てたので、二年後に正規職員にしていただいたのです。考えていたとおり市役所は多面性をもって

いたから、先ほどあげた五つのうち、建築家を除く四つの側面は持ち得たと思います。

個別構造物を魅力ある空間的形態に

編集部　アーバン（都市）デザインを専門的になさるようになったのは、どういうところからですか。

岩崎　ぼくにすれば五つのうちの一つの面という意味あいになりますが、市役所の中では、ぼくがハーバード等でアーバン・デザインを学び、空間の諸関係について理解を養なってきたという特質から、相対的にアーバン・デザイン担当に位置づけられたのだと思います。それも横浜市へ来て四年たってからですね。それ以前にも日本には、丹下健三氏などのいうアーバン・デザインという言葉はあったのですが、少し意味がちがいます。今のようなアーバン・デザインの考え方がひろまるようになったのは、横浜市にアーバン・デザイン担当という機構ができてからでしょう。

アーバン・デザインの目的には二つあると思います。一つは現行の都市計画法や建築基準法ではバラバラに作れる物的構築物を、魅力ある空間的形態に誘導していくことと、そのためには都市内の活動とか機能の配置や量的諸関係をも動かして、魅力ある形を誘導していくことですね。もうひとつは高度成長政策の過程で見落されてきた、あるいは軽くみられてきた価値を擁護しようとすることです。安全で気持よく歩けるとか、緑を豊かにとか、歴史的遺産を大切にとか、水辺にふれるなどといったものが、自動車優先の都市体系の中で見落されていたが故に、なんとか復権して都市の中で実現させたいということです。この二つを目標にして九年間、ぼくは市役所で仕事をしてきたと思います。

必要な都市の自治

編集部　そのような目標を具体化していこうとすると、いろいろ難しい問題にぶつかると思いますが。

岩崎　難しさにはいろいろな段階がありますが、まずベースには、高度成長時代は環境を守るよりは不動産的価値に眼がいきやすいし、市民自体も都市デザイン的価値にあまり重きを置いていなかったので、いかにそれが大切かを理解していただくかが大変なことでした。

いざ形にしていこうとする段階では、初めの頃はアーバン・デザインを「装飾」と理解して、予算を少し上乗せして、彫刻を置くとか、建物の前面の壁面を少し豊かにすれば済むというような受取り方がありました。そうではなくて都市の中の施設と施設、建物と建物の関係を矛盾なく配置し形態づけることで、基本的には調整機能なんですよね。たんにお金を余計かければよいことではない。それまで経験してこなかったことなので、口でいうだけではなかなか理解してもらえなかったのですね。たとえば山下公園前のペア広場は、県民ホールと産業貿易ビルが互いに協力し合うことによって新たな価値が生み出されているわけです。

次には、行政はふつうタテ割に分化して行われていますが、都市デザインには総合的視点が必要なのです。ある地域を対象とするとき、道路、公園などに分化してみるのでなく、各施設の相互関係をみようとする。その意味では行政を横割にみようとする企画調整機能があって、考えを現実に具体化できたと思います。

都市デザインというのはその場その場の魅力をつくり出していくことで、よそで良く出来たものを模倣することではない。その場の事情を尊重しながらそこの特徴を引き出すことであり、既成のものや慣例にとらわれず、創意工夫していくということです。建築基準法ひとつとってもその解釈や運用で地域に適合した形で対応しようとする自治体の自治性が根底にないと、都市デザインは柱を失うことになります。

勉強素材豊富な市役所

編集部　横浜市役所生活をふりかえってどんな感想をお持ちですか。

岩崎　組織の中で自分の考えをもって仕事をしていこうとするとき、人それぞれがそれぞれの考えや事情で動いているし、それぞれの組織にはそれぞれの法律や予算、もっといえば長年の因習などに規制されているのだから、そうやすやすとは自分の考えは通らない。ぼくはそこでなるべくプラスの面をみて、グチはこぼさないようにしてやってきたのです。

自分を高めようとすることと、ものごとを総合的にみることを同時に追求できたし、自分の持っているものを生かしながら現実の中でさらに勉強できて、極めて楽しい九年間でした。

市に勤め始めた頃よく母に「どう、市役所は」と聞かれて、「よい勉強になるよ」と答えていたけれど、実際、市役所は多面性をもっている。福祉の問題から、物的な問題、組織、予算、法律的問題などあらゆる分野にかかわりがあり、現場にも近いから生の素材もふんだんにある。住民との問題も多い。学ぶべき材料は山ほどある。その中でぼくは都市デザインの分野で現場を通して学びつつ、総体的な関係も若干理解できたと思います。グループをつくって勉強していたわけではないのですが。そういう話もあったが実現はしていない。グループでも自

分一人でも、現場で得た経験をできるだけ抽象化し、理論化していくことを、一方ではできるかぎり追求すべきなのでしょうね。ぼくがそれを十分しえたわけではないのですが。

三――アフリカからアメリカへ

横浜へ

「建築から都市へ」の移行

編集部　横浜市に入られる前はガーナとアメリカを経ておられますが、その都度、何を求めて動いてこられたのですか。

岩崎　一九六三年に東京芸大建築科を卒業したのですが、卒業後、建築設計事務所に入り、六ヵ月で辞め、友人と一年半やり、そのあと建設会社などに入って建築工事の現場監督などもやりました。その頃は高度成長期に入った頃で、数多くの住宅が作られていました。ぼくも大学で「質の良い居住環境をつくる」ことを学んだので、〝良いうちをつくる〟ことに努めてきたのですが、せっかく良い設計の家を作ってもすぐ南側にアパートが建って日影になるというような経験を何度もしているうちに、自分が徹夜して図面をかいて家を作ることと、全体とがどう関係しているのという相対的関係が気になりだしたのです。いってみれば「建築から都市へ」の移行の発端ですね。

「その頃、学生時代に読んだガーナのエンクルマ大統領の書いた「アフリカの統一」という本が印象に残っていまして、長年の植民地から独立して、新都市の建設も含めて新しい出発点にたっている国々では、建築と都市との関係を日本とはちがった形で理解できるのではないかと考えて、ガーナ大使館を訪れたのです。その頃は英語も十分話せなかったのですが、あなたの国で働きたいと申し出たのです。運よくその当時ガーナは教育に力を入れていて、世界各国から人材を集めるプログラムがあり、その一環として招かれたわけです。ガーナ国立工科大学建築学部専任講師を二年勤めました

人間みな同じ――ガーナでの印象

編集部　ガーナで感じられたことは何ですか。

岩崎　当時のガーナは独立の意気は盛んでしたが、長年の植民地化で人の心まで植民地化され、外国勢力に対する自国の伝統への意識が薄いということに気づきました。国づくりのかけ声の割には国民の能力が十分発揮できないでいる状況でした。

教えるかたわら夏休みによく旅行をして、おもしろい家があると見せてもらったり、ひとつの村で測量調査もしました。あるとき一軒の家へ入っていくと、一〇歳ぐらいの赤ん坊を背負った女の子が出て来て、留守ですというのだが、ドロでできた家の中ではよさそうな客室のような部屋に案内されて、ゴザに座って一生懸命もてなす感じがあるわけです。そしてわれわれが帰るとき、おみやげに卵をくれるのです。その地方で卵といえば非常に貴重なものなのですが、一〇歳の女の子にしてそういう対応する、非常に礼節に富んだ人たちなのですね。どんなに貧しくても人間としての尊厳をもっているということを極めて印象深く感じました。その意味では人間みな同じというのがガーナで感じたことですね。

アメリカ社会を実感できない限界

編集部　ガーナからハーバートへ行かれたいきさつは？

岩崎　二年間そこにいて、人間の生活は建築にとどまらず、都市というひろがりの中で人間とかかわっている、だから建築と都市との関係、とくに都市の勉強をしたいという思いがいっそう強くなった。幸いガーナではお金を使う機会がなくて、貯えができましたから、それでもって、ハーバード大学の修士課程で二年間学んだのです。

編集部　アメリカで得たものは、どういうものですか。

岩崎　都市の勉強をしたのですが、いちばん学んだのは、ものを科学的にみる手法、あるいはものごとを論理的に考える訓練ですね。ぼくは芸大出だから、それ以前は感覚的にものをとらえようとした傾向がすごくあったと思う。どうしてもとらなければならない科目の単位をとるうちにそういうことをいちばん得たと思います。

もうひとつ感じたことがあります。それが横浜市へ来る動機にもなるのですが。二年間のハーバード大学のあと、ボストン市役所に四ヵ月勤め、民間コンサルタントにも二ヵ月いたのですが、そのとき、アメリカ人がどういうものに価値を見出すか、例えば通りと家の関係がどのような状態にあれば好ましいと感じられるか、書物を読んで勉強する範囲ではわかるのだが、実感としてはわからない。とくに黒人と白人の対立が都市問題の大きな比重を占めているのですが、どういうレイアウトが問題解決や生活条件の改善に役立つかが、外国人では理解できないのですね。自分の持っている技術を、どんな状況においてもただ要請のままに出すという対応の仕方も、ひとつの技術馬鹿的なやり方としてはあると思う。しかしほんとうは、技術を出すことによってどういうものが生まれてくるのかを知らなければいけないと思うのだが、アメリカ社会をよく理解できない外

国人のぼくにはそれが実感できない限界がある。だからこそ日本に帰ってやらなければならないと感じたのですね。

四――そして、いま

地域とのコミット――アジアへの目

編集部　そこで先ほどいっておられた自治体の可能性、おもしろさにつながるわけですね。

岩崎　結局、横浜へ行く過程で最も先進国であるアメリカと最も後進国であるガーナとを、日本から等距離の同心円上をまわったかたちで帰ってきたという感じだったですよ。そこで強く感じたのは、地域にかかわらなければ何もできないということですね。ぼくは日本人であるし日本人の生活実感を持っている以上、日本のある地域にコミットし、そこを豊かにすることによって他の地域との関係も生ずるということです。技術の切り売りではなくて、地域に参加することによってものを見よう、それによってアフリカやアメリカとの関係も見れると考えたのです。だから、地域が自らの地域を治めるということは尊重されなければならないと思っていました。

しかしアジアへ行ってみると、それまでは日本である特定の地域にコミットしさえすれば問題ないと思っていたのですが、日本の経済が地域にコミットすることによって豊かになり、その結果が他を虐げることになっているとしたら、ということが気になりだしたのです。日本経済の対極にあるアジアのスラムとの関係を考えなおさなければまずいのではないかと、今しきりに感じているわけです。

編集部　筑波大学へ移られたのはどんないきさつからですか。

岩崎　子供の教育の問題が一つの契機ですね。私には息子が二人いるのですが、彼等が日本人で、日本語を最も得意とする以上、日本へ帰って教育を受けなければまずいと考え、上の子が中学一年の十二月に、いま通っている筑波研究学園都市の中にある私立中学の転校試験を受けさせたのです。そうしたら受かったのですが、この学校は帰国子女受入れ校で、寮制なんですね。しかし中学一年からの寮生活は、自分で洗濯するとかその他、かわいそうと思えるところがあるので、高校前半ぐらいまでは親と子が一緒に住んだほうがよいと考えたのです。同じ頃、筑波大学へどうかという話があり、それなら息子も自宅から通える好都合なので、筑波大に決めたのです。

建築から都市へ、さらに政治・社会へ

編集部　いま日本に戻られて七カ月ですが、これまでを振り返ってどんなことを考えておられますか。

岩崎　人間は自分を表現する手段をいろいろもっているし、またどういうものにも可能性をもっているものだと思います。ぼくの場合、建築から都市へと関心が移ってきたのですが、さらに地域、政治、経済、社会へという全体的なひろがりを持ちたいと考えています。なぜ一種の専門職へと追い込まれるのかというと、それは仕掛けられたワナかなと思います。ワナを打ち破って、自分の持っているものを豊かにすることはできるはずだと思うのですよ。

そして、問題の正面を向いて都市とかかわる場合に、自治体にまさる職場はないと思います。学校の先生、コンサルタント、建築家、住民運動家、国家公務員など、それぞれにそれぞれの意味があるだろう。けれども最も多面的な運動体になりうるのは自治体ではないか。可能性を秘めたという意味では、自治体職員は最も恵まれた環境にあると思いますね。

ぼくの場合はこれまでの経過から、いま国立大学の先生をしているのですが、それはまたちがう角度から勉強する機会であると考えています。とりわけ第三世界の人々との関係について勉強していきたい。時間的ゆとりがあるので、この環境で勉強していくのも有効な方法と思っています。

編集部　それでは最後にひとこと。

岩崎　これまでのぼくのうつり変りをこのような形で凝縮してお話しすると、スムーズに場所を変え仕事をこなしてきたように感じられるかもしれないけれど、実際は、ひとつの仕事から別の仕事へ移るとき、両者の都合やタイミングがうまくつながらないとストンと落っこちてしまうこともあり得るわけで、不安感はいつも感じていました。日本社会は「辞める」ということに抵抗感があり、新しい職場を開拓するのも大変ですが、どこの職場でも自分の限界を知って、気持ちよくやりたいといつも思っています。

〈筑波大学社会工学系助教授〉